

町と稱したりけん。明治四年四月戸籍編成の際里見町へ屬せり。

○苗屋橋

金澤橋梁記に、赤ね橋、立町うら。とあり。此の橋は苗屋小路と柿木島との境なる倉月用水川に架けたる往來橋也。舊傳に云ふ。昔苗屋理右衛門茜染をなしたる頃、此の橋下の流にて染物をば洗濯せり。故に苗屋橋とも苗橋とも呼べりと。又一名を刑部橋共呼べり。そのさき中村刑部の邸宅ありし故に稱したりと。今は此の名絶えて知るものなし。又一説には、此の橋昔は板僅に三枚を並べ橋となしたり。故に三枚橋と呼べり。此の名も今は知る人なし。思ふに、いにしへ此の地邊柿木の畑地なりし比の事ならんか。又寶曆八年の金澤圖に、橋番人の家とて橋爪に記載すれど、此の橋に橋番人はなし。繪圖の誤也。右橋爪の家はもと一戸なりしかど、寶曆十二年九月割家をなし、二戸となし、今もある也。

○中村刑部舊邸

苗屋小路西側の地面は残らず中村刑部の邸地なりしを、子



孫配知して數家に分れ、邸地も隨つて割地して、同姓數家並び建ち居住せりと云ふ。故に延寶の金澤圖にはこゝに掲げたる如く描けり。又元祿六年の土帳に、中村平六堅町あかねや町、中村彌三右衛門堅町脇田知左衛門近所、中村竹松彌三右衛門近所、中村吉郎兵衛堅町脇田小左衛門向、中村三郎左衛門堅町里見七左衛門近所。など、載せたるは、皆中村刑部の子孫なり。明治維新の際まで中村氏二名尙居住せしかど、遂に悉く退去せり。

○中村刑部家正傳

中村刑部家正が父は中村肥前と云ひ、宇喜多中納言秀家の家士にて、家正も初め次郎兵衛と稱し、宇喜多家に仕へたり。家譜に云ふ。刑部家正、初め宇喜多家に於て家老の人々と不和に成り、關原合戦の前秀家卿の内意により備前を立退き浪人と成り、後加州へ來りける處、利長卿越中五ヶ山へ遣されしが、慶長七年召返され、家祿二千石を賜はり、足輕頭を勤め、寛永十三年歿す。とあり。關屋政春の古兵談に云ふ。備前宇喜多中納言秀家は領國備前・備中・美作・播磨の内合八十萬石の大名にて、秀吉公の御掣也。安土

にて利家卿の御娘子を誕生あると、其儘養子に被成、秀家へ被嫁たり。依之威勢強く、生得才發にして武勇も備はりし故、御名代として朝鮮へ渡海し、過禮を好まれし人なり。朝鮮にて、諸大名を野中に五百餘人、木具仕立にて振舞給ふやう成る人也。是に依りて金銀を好み、中村次郎兵衛と云ふ者出頭して所帯を約やかにし、國中へ課役を掛け金銀を集むる。國の仕置も大方次郎兵衛するなり。譜代の家老戸川肥後守・花房志摩守・宇喜多左京・長船越中四人也。次郎兵衛と問惡敷、後には家老不和に成り、四人ながら備前を立退き、直に徳川家康公へ行き、長船の外三人は家康被召抱。是に付家康と秀家と中よからず。石田亂の時も無二の石田方也。右中村次郎兵衛、後に前田家へ被召出、中村刑部と改名すと、備前浪人芳賀宗惠語ると。又秀家關原の時三成と一味に依りて、八丈嶋へ遠流。家禮の儀は、大身はならず、小身者は誰にても可被遣と被仰出たり。秀家惡大將ゆゑ人を御見知なく、中村次郎兵衛勝手の圖りを上手に致し、金銀を取上ぐる事許工夫仕る者を念比に被成、武道の用に立つ者は一圓御見知なきに依りて、此時に御行當